

# 立教大学

[ RIKKYO UNIVERSITY ]

## スポーツを軸にして ウェルビーイングを 科学的・多角的に追究する スポーツウエルネス学部 (2023年4月設置構想中)



アスリートの分析に関する科目の充実度にも注目

幸福や健康を意味するウェルビーイングへの関心が社会的に高まるなか、立教大学は2023年4月に、スポーツを通してウェルビーイングを追究するスポーツウエルネス学部を新設する。同学部ではどのような教育に取り組み、どのような人材の輩出を目指しているのか。学部長に就任予定の沼澤秀雄教授や教員・学生のインタビューから明らかにしていこう。

取材・文／伊藤敬太郎

### スポーツを軸として多角的に ウェルビーイングを追究する

立教大学は2023年4月、既存のコミュニティ福祉学部(コミュニティ政策学科/福祉学科/スポーツウエルネス学科)を改組し、スポーツウエルネス学部を新設する(図1)。

新学部のコンセプトについて、学部長に就任予定の沼澤秀雄教授は次のように解説する。

「『すべての人の生きる喜びのために』を理念とし、スポーツを通して、ウェルビーイング、つまり人々がより良く生きることを追究するのを目的とする学部です。教育におけるポイントは、「スポーツリベラルアーツ」ともいうべき多様性です。スポーツを軸に人間性を養い、人の心身に関わる科学を学びながら、国際性やデータサイエンスなども幅広く学ぶことで、社会のさまざまな場面で活躍するジェネラリストを育てていきます」

スポーツウエルネス学部は、スポー

ツ選手やスポーツが好きな学生だけでなく、より幅広く、心身のウエルネスや社会のサステナビリティに関心のある学生も受け入れる予定だ。

「本学部新設の背景の一つには、ウェルビーイングに対する社会的な関心の高まりがあります。特にこのコロナ禍において、それは顕著になりました。ステイホームで身体を動かす機会が減ったことがメンタルにも大きく影響したことは多くの人たちが感じていることだと思います。人の心と身体はつながっています。その意味で、身体を動かすスポーツを軸にウエルネスを考えるというアプローチはこれからの社会に



沼澤秀雄  
学部開設準備室長

とって非常に意義が深い。だからこそ幅広い関心をもつ学生に学んでもらいたいのです」

このようなコンセプトに基づき、同学部では、図2に示した3領域で教育を展開する。スポーツ科学に関する領域だけでなく、心身のウエルネスや環境・サステナブル・スポーツ教育に特

図1 2023年4月の改組構想

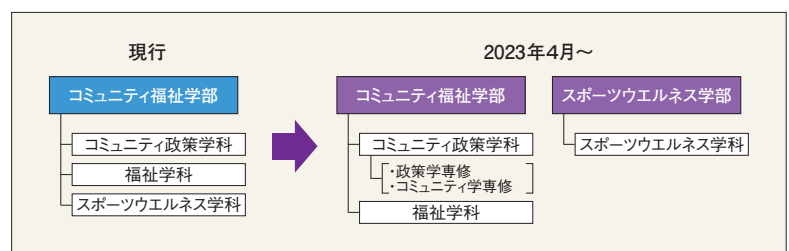


図2 スポーツウエルネス学部の3つの学び領域



化した領域を設けているのが大きな特色で、アスリートパフォーマンス領域、ウエルネススポーツ領域、環境・スポーツ教育領域の3領域でスポーツ指導者、トレーナー関連資格、健康運動指導士、レクリエーション・インストラクター、中学校・高等学校教諭一種免許状（保健体育）、キャンプインストラクターなどの資格も目指すことができる。

### データサイエンスや語学にも力を入れたカリキュラム

また、「スポーツリベラルアーツ」を象徴する共通科目(図3)について沼澤教授はこう説明する。

「中心に置いているのはスポーツマンシップ論とスポーツリーダーシップ論の2科目です。アスリートが競技を通して養うマインドやリーダーシップは社会の幅広い分野に応用できるもの。まずはこれをしっかりと学んでもらいます。また、ウエルネスに関しても生命科学や心理学など多様な観点から学んでいきます」

データサイエンスに関する科目の充実度も注目される。

「コロナ禍で多くの人が改めて実感することになりましたが、今の時代はあらゆる分野でデータに基づいた実証的な議論が求められます。スポーツやウエルネスについて考える際にもデータサイエンスに関する知見や技術は必須と考え、共通科目に組み込みました」

世界中の人々の健康状態といったビッグデータも扱うほか、選手の競技中の動きのデータを収集、分析するといったアプローチもあり得る。スポーツはデータを豊富にとることができ、結果もわかりやすく示されるので、楽しみながらデータサイエンスを学ぶことができるはずだ。

また、専門英語科目群では、アスリート出身の外国人教員が指導に当たるなど、同学部ならではの特色ある英語教育が展開される予定だ。

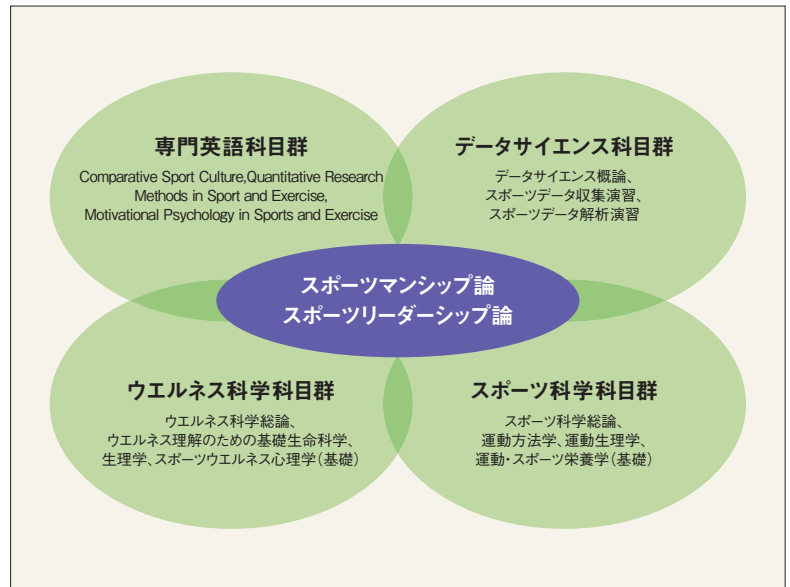
さらに、大学教育では異例のeスポーツにも目を向ける。

### eスポーツに関する教育・研究にも取り組む

「豊島区、新座市、東京ヴェルディの協力を得て寄付講座を開講する予定です。eスポーツに関しては社会的な注目度が高まっている一方で、科学的な研究はまだ進んでいません。本学部はここに取り組んでいきたい。例えば、ゲームによる神経系の活動が脳の活性化にどう関係するのか、eスポーツを通して養われる集中力が実社会での仕事力にどうつながっていくのか、やりすぎることによって心身にどのような悪影響があるのかなど、eスポーツの功罪両面を科学的に明らかにしていきたいですね。また、障がいのある人も健常者と対等に楽しめるeスポーツというプラットフォームを、インクルーシブなコミュニケーションやコミュニティ、まちづくりはどう活かしていくかということも研究対象としていく予定です」

同学部が取り組む多様で先進的な教育は、これからの社会におけるスポーツの可能性を示すものといえる。ウエルビーイングに貢献するどのような人材が輩出されていくのか、同学部への期待は大きい。

図3 多様なスポーツウエルネス学部共通科目



## 国際比較から日本のスポーツ界が抱える課題を研究

### 日本とヨーロッパの比較を通して スポーツ文化・組織・制度を研究

オーストリアの元女子柔道代表選手であり、立教大学では海外のスポーツ文化やスポーツマネジメントに関する科目を担当するライトナー・カトリンJ.准教授は、自身の経験を踏まえ、アスリートのセカンドキャリアをはじめとするスポーツの組織・制度に関する研究に取り組んでいる。

「日本社会や日本特有の価値観の上に築かれたスポーツ文化・組織・制度の特性をあぶり出し、社会学的思考によって分析しています。加えて、日本に対してヨーロッパはどうなっているのか、両者の違いや共通点はどこにあるのかといった国際比較を通して、スポーツを取り巻く環境を一層充実させること

を目指しています」

では、研究活動を通して見えてきたものとは何なのだろうか。

「日本では、スポーツは『極めるもの』であり、試合での勝利や記録の更新を目指しながら、最後までやり遂げることが美徳とされているような印象です。組織には厳しい上下関係や根性論といった独特の『ジャパニーズ・マインド』が浸透していて、教育や人間力の形成といった側面も併せもっています。一方で、ヨーロッパではスポーツはあくまで楽しむものであり、それぞれが自分のスタイルでスポーツに取り組んでいます」

このような違いから、例えばヨーロッパのアスリートは現役時代から競技以外の分野にも興味関心を持ち、セカンドキャリアも多様であるのに対し、日本のアスリ



コミュニティ福祉学部  
スポーツ  
ウエルネス学科  
ライトナー・  
カトリンJ.准教授

ートのセカンドキャリアは画一的になりやすいという。このような国際比較の観点から、現在はスポーツ組織のガバナンスを研究するライトナー准教授は、日本の学生にこんなメッセージを贈る。

「日本は周囲の動きに合わせてよとする学生が多い印象を受けますが、もっと自由にいろいろなことに挑戦してほしいですね。私の役割はそのために、日本人にはない『外の視点』を伝えることだと思っています」

### 学生インタビュー

## スポーツを軸に多角的な視点を養うことができた

### スポーツや健康を科学的な視点で 捉え直すことができた

中学時代から部活動でサッカーに打ち込んできた高橋七海さんは、大好きなスポーツを軸に、社会・福祉との関わりやマネジメントなどを幅広く学べることに魅力を感じ、スポーツウエルネス学科に進学した。

「入学後の学びは新たな発見ばかりで新鮮でした。例えば『健康の科学』という科目では、運動・休養・栄養という健



コミュニティ福祉学部  
スポーツ  
ウエルネス学科4年  
高橋七海さん

康を支える3つの柱について科学的に学ぶことができました。睡眠の質の重要性など、高校時代まではあまり意識することもなかったですから。また、『スポーツスタディ』『スポーツプログラム』という全学共通の科目で、フラッグフットボールやアダプテッドスポーツ（障がい者や高齢者も楽しめるスポーツ）など未知の競技を経験できたことも勉強になりました」

ゼミでは、3年次に音楽がアスリートのパフォーマンスに与える影響を、4年次に体重減少とアスリートのパフォーマンスの関係を研究。実験では想定外のデータが出てくることも多く、科学的なアプローチの重要性を実感することができたという。

また、高橋さんは、入学後、女子サッカーチームを体育会に昇格させる取組

にも尽力。ここでも学科における多角的な学びが役立った。

「チームの一人ひとりと話し合い、意識を統一させたり、応援してもらえるチームになるための方法を考えたりする際には、授業で学んだことが活かされました。そのほか周囲を動かすときの熱意の大切さ、組織運営や会計に関する知識などもプラスに働きました」

では、4年間の学びを通して高橋さんが理解した「ウエルネス」とはどのようなものなのだろうか。

「人生に価値を見出し、人生を楽しむことがウエルネスなのだと感じています。それはスポーツに全力で打ち込むことによっても、スポーツを見て楽しむことによっても実現できること。この考え方は社会人になっても活かすことができると信じています」